

博士學位論文

内容の要旨

および

審査結果の要旨

甲第193号

2022

創価大学

本号は学位規則（昭和 28 年 4 月 1 日 文部省令第 9 号）第 8 条の規程による公表を目的として、令和 4 年 9 月 10 日に本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨および論文審査の結果の要旨を収録したものである。

学位番号に付した甲は、学位規則第 4 条 1 項（いわゆる課程博士）によるものである。

創価大学

氏 名	西村 智恵子
学位の種類	博士（教育学）
学位記番号	甲 第 1 9 3 号
学位授与の日付	令和 4 年 9 月 1 0 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 創価大学大学院学則第 3 1 条第 2 項該当 創価大学学位規則第 3 条の 3 第 1 項該当
論文題目	自閉症スペクトラム児の母親における 子育ての体験プロセスに関する研究
論文審査機関	文学研究科委員会
論文審査委員	主査 高野 久美子 創価大学大学院文学研究科教授 委員 遠藤 幸彦 創価大学大学院文学研究科教授 委員 伊藤 良子 東京学芸大学教職大学院特任教授

論文題目

自閉症スペクトラム児の母親における子育ての体験プロセスに関する研究

1. 論文内容の要旨

本論文は、「自閉症スペクトラム児を育てる母親における子育ての体験プロセス」をテーマに、乳幼児期・学童期・社会的自立に向けた時期に分けて分析を行うことで、自閉症スペクトラム児の母親への、それぞれの時期における支援の在り方を探ることを目的とした探索的な研究論文である。

自閉症スペクトラム児・者はその“社会的コミュニケーションの問題”“常同行動”“こだわり”“感覚過敏・鈍麻”等の特徴ゆえに日常生活の中で特有の生きづらさを抱えていることが多く、周囲の理解と適切なサポートによって、その生きづらさの軽減を図っていく必要がある。自閉症スペクトラム児・者本人に対する発達支援、環境調整、法的整備など様々な側面からのアプローチがあるが、それらのサポートを的確に行うためには、当事者の体験や声を丁寧に拾い上げていく必要がある。また、自閉症は加齢とともに障害特性や問題行動等、諸症状が変化していくため(宇津・伊藤,2014,p96)、それに伴って母親の子育てにおける“困難さ”にも変化が生じ、母親の“困難さ”の変化によって、支援ニーズも変容することが指摘されており、発達段階ごとのニーズの把握が必要である。こうしたことから、本論文では、「自閉症スペクトラム児を育てる母親における子育ての体験過程」をテーマに、自閉症スペクトラム児の母親における子育ての困難さに焦点を当て、母親の語りからその体験プロセスを分析することで、支援の在り方についての検討を行い、乳幼児期、学童期、社会的自立に向けた時期、それぞれにおける母親の体験プロセスの特徴を明らかにすることで、それぞれの時期におけるより良い支援の在り方を考察した。

本論文の大きな特徴は、母親の“実際の語り”を重視している点、縦断的な調査を実施し詳細な質的分析を行っている点であり、他に例が見られない。母親が子どもとの生活の中で、どのような困難に直面し、その困難にどのように対処し、どのような気持ちを抱き、そして、母親自身がどう変わっていくのか、それらについての真に迫った理解を“実際の語り”を通して得ようとする大変意欲的な取り組みである。

本論文の目次は以下のとおりである。

第1章序論 本研究の背景と目的

第1節 自閉症スペクトラムと発達障害

- 1 自閉症の概念
- 2 発達障害

3 関連法令

第2節 自閉症とスペクトラムと支援

- 1 自閉症スペクトラムの療育
- 2 自閉症スペクトラム当事者を対象とした研究
- 3 自閉症スペクトラム児・者と家族

第3節 本論文の目的

第2章 乳幼児期自閉症スペクトラム児を育てる母親への支援の在り方

第1節 研究Ⅰ

乳幼児期自閉症スペクトラム児をもつ母親のストレスと対処行動の関連について

- 1 問題と目的
- 2 方法
- 3 結果
- 4 考察
- 5 行動上の問題への母親の対処行動と随伴する感情の検討

第2節 研究Ⅱ

乳幼児期自閉症スペクトラム児の母親における困難への対処に伴う体験のプロセス

- 1 問題と目的
- 2 方法
- 3 結果
- 4 考察

第3章 学童期自閉症スペクトラム児を育てる母親への支援の在り方

第1節 研究Ⅲ

学童期自閉症スペクトラム児の母親における困難への対処に伴う体験のプロセス

- 1 問題と目的
- 2 方法
- 3 結果
- 4 考察
- 5 本研究における今後の課題

第2節 研究Ⅱと研究Ⅲの比較

第4章 研究Ⅳ

中学入学以降の自閉症スペクトラム児の母親における子どもの社会的自立に向けての体験プロセス

第1節 はじめに

第2節 調査1：連絡帳の分析

- 1 目的
- 2 方法
- 3 結果
- 4 まとめ

第3節 調査2：インタビュー調査

- 1 目的
- 2 方法
- 3 結果
- 4 考察

第4節 おわりに

第5章 結論 総合的考察および今後の課題

第1節 各研究の概要

第2節 総合考察

第3節 本論文の意義と今後の課題

参考文献

第1章では、自閉症スペクトラム（以下 ASD）の概念や諸特徴 ASD 児・者本人および養育者への支援に関する先行研究を概観し、ASD 児の子育てには特有の困難さがあり母親は大きな心的負担を抱えやすいこと、また、子どもの発達によって困難さが異なり、それに伴って支援のニーズも変化していくことなどが確認された。

第2章は、研究ⅠとⅡで構成されている。研究Ⅰでは、ASD 児の母親 10 名に対し質問紙調査及びインタビュー調査を実施し、“愛着困難因子”に着目し、高群 3 名・低群 2 名の計 5 名について考察を行った。「愛着困難」因子高群では、〈言葉もしくは身体の拘束による子どもの行動の制御〉〈子どもの行動制御における不全感からくる感情的対処〉が、「愛着困難」因子低群では〈子どもの状態や子どものペースに合わせた対処行動〉〈子どもの成長を待つ行動〉が特徴として見いだされた。さらに、10 名のインタビュー記録の分析結果から、母親の対処行動とそれに伴う負の感情のパターンを検討した結果、身体的な制止、言語による制止には疲労感・苛立ちなどの負の感情が伴いやすいこと、問題を事前に回避する行動や子の気持ちに焦点を当てた行動は、母親の心的負担を軽減させる可能性があることが見いだされた。研究Ⅱでは、研究Ⅰにおける調査協力者 10 名のうち、研究Ⅲにおける調査協力者でもある 8 名にインタビュー調査を実施し、乳幼児期 ASD 児の母親がた

どる体験のプロセスについて検討を行った。その結果、次の5点が見いだされた。①子育てにおける困難は【ASDの特性による問題】と、【ASDの特性に付随する問題】の2つに分類されること②母親が目の前の困難に対して分からなさや不安を抱えている時期においては、危険回避のためのその場しのぎや、母親自身が身を削るような対応が多く取られていること③ネガティブな気持ちを抱きつつも、子どものために奮闘する過程で母親は少しずつ子どものことを理解していくプロセスを辿ること④子どもの変化への気付きや成長の実感が、母親のネガティブな気持ちを軽減させていること⑤配偶者・親族、母親仲間など周囲の情緒的なサポートが有効であると母親が認識していること。

第3章では、研究Ⅲ、および前章の研究Ⅱとの比較が行われている。研究Ⅲは学童期自閉症スペクトラム児の母親における困難への対処に伴う体験のプロセスの分析をテーマとし、学童期ASD児の母親8名にインタビュー調査を実施し、子育てにおいて母親が遭遇する困難とその対処行動をM-GTAにより質的分析を行った。その結果、子育ての困難に対処する経験を重ねて“子ども理解の深まり”が生まれ、母親の生き方にも変化がみられること、ソーシャルサポートが負担感軽減に大きく影響すること、学童期特有の困難として学校の理解を得ることの難しさや進路・就労への不安があることが見いだされた。研究Ⅱおよび研究Ⅲの比較を通して、“ASD児の母親の体験プロセス”の乳幼児期から学童期への変化について検討を行ったところ、ASD児の行動問題が学童期には軽減すること、経験則による対応が可能になり母親の負担感軽減につながっていること、子ども理解の深まりが母親自身の生き方、母親自身の自己理解、他者への寛容さに影響を与えていること、子ども理解を土台にして将来への見通しが現れることが示唆された。

第4章は、「自閉症スペクトラム児の母親における子どもの社会的自立に向けての体験プロセス」をテーマとした研究Ⅳの結果と考察で構成されている。特別支援学校中学部および高等部に在学していたASD児の母親1名に調査協力を依頼し、高等部3年間の学校との連絡帳の分析（調査1）と、中学部および高等部、そして高等部卒業後1年間についてのインタビュー調査（調査2）を通して、子の社会的自立に向けてASD児の母親が辿る体験プロセスについて、分析を行った。調査1では高等部3年間の就労に向かって、1年次では事業所への見学等を意識し、2年次では、事業所の種別の決定、子に対する就労への意識づけ、3年次では卒業後の進路の決定と具体的な手続きという就労へのステップが示された。調査2では、就労イメージが具体化し、母親としての当事者意識が芽生えること、就労に向けての具体的なステップを母親なりに工夫していること、その中で子の成長に気づき、静観の態度を基本に子の気持ちの揺れの保障を心掛け、時には困難場面への押し出しを行っていることが示された。

第5章はこれまでの研究を踏まえた総合的考察と今後の課題についての考察で構成されている。

総合的な考察においては、乳幼児期・学童期・社会的自立に向けた時期に分けて分析を

行うことで、自閉症スペクトラム児の母親への、それぞれの時期における支援の在り方を考察し、具体的な支援の方向性を提案している。乳幼児期における支援の在り方としては、乳幼児期 ASD 児の母親の否定的感情の根底には、自責の念が存在する可能性が示されたことから、専門家による心理教育等を丁寧に行っていく必要性を指摘した。また、適切な母親の行動様式として「問題を事前に回避する」、「子の気持ちに焦点を当てる」、「他者に任せる」、「見守り待つ」といった対処行動様式にシフトできるように支援すること、母親の苦勞を情緒的に受けとめつつ、子どもを理解していく過程を共に辿っていく支援が重要であることを指摘している。学童期においては、子の特性を長所やストレンクスとして認識できるように促す支援が重要であること、支援者が母親の周囲にある人的サポート環境を把握し、時には支援者が周囲に介入する必要性があることを示唆した。社会的自立に向けた時期では、ASD 児の就労について具体的にイメージすることが出来るような情報の提供等の支援が重要であること、学校卒業後に活用できる支援機関等の情報提供を早い段階から行い、卒業後の支援に確実につなげていくことが必要であること、職業準備性を高めるためにも、家庭において日常生活・社会生活の能力の向上が図れるようなサポートが重要であることが示された。また、ASD 児が働くことを意識し、働きたいと思うことができるような授業や就労支援プログラム等によるサポートは、ASD 児・者本人にとってだけでなく、母親にとっても有用であることが示唆された。

今後の課題として、より多くのデータの蓄積、母親自身の属性や周囲の環境、障害受容の問題などの幅広い視点での分析の必要性、サポートが届いていない可能性のある母親・父親・きょうだいなどの母親以外の家族への支援も視野にいれ、家族全体の包括的な支援を考える必要があるとしている。

2. 論文審査結果の要旨

本論文の独創性と評価すべき諸論点は以下のとおりである。

第一に、テーマそのものは高い独創性があるとは言えないが、方法論において ASD 児を持つ母親の語りを縦断的に詳細に分析したという点では、他にあまり例を見ない研究である。障害のある児童の母親から研究協力を得ること自体が困難であり、しかも長い期間にわたり縦断的に調査ができたこと、また 1 例とはいえ、特別支援学校高等部 3 年間の学校との連絡帳を質的に分析し、インタビュー調査と併せて就労までの道のりを分析した研究は大変貴重である。

第二に評価すべき点は、実際に支援を必要とする当事者を研究協力者としているが、筆者があたかなまなざしを持ちながら、客観的かつ冷静な視点で、情緒的に流されることなく丁寧な分析を行っている点である。この研究が可能になった背景には、筆者が ASD 児の母親に対する支援に携わり、母親たちとの間に信頼関係を結ぶ努力を継続し、信頼関係を積み重ねていたという事実がある。研究者が支援者として研究協力者とのかかわりがある場合、

分析が情緒的な解釈に流れるリスクもあるが、本論文では、寄り添う姿勢は堅持しつつ、客観的視点を失わず冷静に分析し実証的に研究するという姿勢を維持している。この姿勢は、筆者の「実践と研究をつなぐ」研究者としての資質を十分に備えていることを示している。

第三に注目すべき点は、「母親の語り」に重点をおいた質的研究であるという点である。障害児・者の保護者を研究協力者とする研究では、質問紙調査による量的研究は見られるものの、縦断的な質的研究は未だ数少ない。質的データの分析方法としてその有効性が検証されている分析手法である SCAT および M-GTA を用い、丁寧かつ緻密に分析しており、その労作性は高く評価できる。

以上のように、本論文は、独創性をもちかつ実証性のある論文として、ASD 児の母親支援をより充実させることに貢献するものと評価できる。本論文は、博士（教育学）の基準を十分に満たす論文と認められ、論文審査について合と判定した。

3. 最終試験結果の要旨

2022年3月25日に本論文についての公開発表会および最終試験が行われた。

審査委員から、①自閉症スペクトラムについての最新の研究成果に関する先行研究がやや弱い。原因論に関する脳科学研究が近年蓄積されてきており、子の行動への適切な対処を考える上で重要な示唆があると考えられるため、広く先行研究について渉獵することが望まれる。②母親に焦点を当てているが、父親と子どもの関係、両親間の関係性、きょうだいなど家族全体の力動も視野に入れるべきではないか③論文構成に一部、統一感に欠ける部分がある。④参考文献リストに不備がある。等の質問と指摘がなされた。委員からのこれらの質問や指摘に対して、筆者はきわめて真摯かつ誠実に応答し、適切な回答をした。

慎重に審査を行った結果、審査委員会の結論として、最終試験を合とすることとした。

以上